九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[047] 史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2338988

出版情報：史淵. 47, 1951-06-05. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

彙　報

史學懇話會

第三十一回　一月二十六日（金）

「両税法以前に於ける唐代の賃課」　松永雅生

第三十二回　二月三日（土）

「橋本左内の思想について」　山口宗之

「近世封建社会崩壊期に於ける日雇について」　古賀芳博

「十八世紀末イギリス農業労働者」　植田豊

以上二回に亙る四氏の研究発表は、何れも本年度卒業論文を中心に為されたものである。

第三十三回　四月二十四日（火）

三十六年度最初の会合として、恒例の新入生歓迎会を開く新制度による初の進学者田中・平野両君を囲み、自己紹介・挨拶が行はれた。なほ名誉教授長沼賢海先生も御出席になり、懐旧の念また一汐であつた。出席者二十七名。

第三十四回　五月五日（土）

糸島郡雷山千如寺の古文書並に国宝観音像の見学を行ふ。前原駅集合後、約一里の行程を踏破して目的地に到著。午後四時、折から降り始めた五月雨を衝いて下山したが、印度哲学研究室の参加を得て参加者は二十六名に達し盛況であつた。

二十五年度卒業論文と新研究生

「両税法以前に於ける唐代の賃課」　松永雅生

「橋本左内の思想について」　山口宗之

「近世封建社会崩壊期に於ける日雇について」　古賀芳博

「チャーティスト運動の研究」　堤市三

「十八世紀末イギリス農業労働者」　植田豊

なほ、四月一日附をもつて、松永雅生氏は東洋史研究室の特別研究奨学生に、山口宗之氏は国史研究室の研究助手に任ぜられた。

東洋史學科の動向

東洋史研究會

第十三回（昭和廿六年一月廿七日）

「明初に於ける女直の遼東移住について」　江島寿雄氏

詳細は「東洋史学」第一輯に発表。

第十四回（昭和廿六年三月卅一日）

「未見君子考」　松本雅明氏

――詩経における新古の層の弁別について――

熊本大学助教授松本雅明氏に遠路の御来駕を乞い研究発表を御願いした。氏の永年の古代史研究の一端として「詩経」に見

える「未見君子」に就いての独自の新見解は、古代史研究者の稀少な我が研究会としては大いに得る所があつたと思う。要旨左の通り。

「詩経」にはいくつかの「未見君子」といふ句が見える。それは多く「既見君子」を伴ふ。従つて句の成立および移行の過程を明かにしうるなら、それらの詩に即するかぎり、「詩経」における新古の層を弁別しうるといふことができる。私は一連の試みのなかの一つとしてこの問題を採りあげたい。

「未見君子」が直接的にあらはれてゐるのは周南「汝墳」で、古註におけるさまざまの異説にもかかはらず、一人の女が木の枝を伐りつつ男を待ち、第二章で会ひえた悦びを歌ふ（既見君子、不我遐棄）ことは明かである。すなはちこの句はたしかに、田園のあひびきを意味する句であり、それは草摘歌である召南「草蟲」、夜の邂逅を歌ふ鄭風「風雨」に基本的なかたちで用ひられるが、後詩は「未見君子」を脱落せしめ「既見君子」のみとなる。しかるにこの句はやがて不在の恋人への物思ひを主題とする秦風「晨風」に用ひられ、さらに唐風「揚之水」になると、「既見君子、云何不樂」といふ句は章末のリフレインとして拍子にちかい性格をあらはす。しかもこの句の恋愛情調をふまへて、秦風「車鄰」は祝宴の句に用ひ、それは小雅「蓼蕭」「頍弁」「出車」においていよいよ推し進められ、「菁菁者莪」「隰桑」になるとさらに君子の頌歌に移行してしまふ。それは凡そ詩形の発展に応ずるが、同時に詩形のみによる新古の分析が危険であることをも示してゐる。

第十五回（昭和廿六年四月廿八日）

「再び明初に於ける女直の遼東移住について」　江島寿雄氏

前回の発表に於いて盛んな質疑応答が行はれ、時間が足らず途中で打切つたが、更に前回の疑点に就いて補足すると共に、全体の立場から詳細に究明された。後日専巧論文として発表の予定。

新刊

昨年の十二月刊行した「東洋史学」第一輯に続いて第二輯を続刊、内容は次の如くである。

北宋時代に謂所「草」に就いて　(一)　日野開三郎
定安国考　(二)　日野開三郎
魏書西域伝考　(一)
—成立と補綴と復原—　船木勝馬
宋史食貨志訳註　研究室員

西洋史學科の動向

西洋史研究會

研究室では定例の研究会を引続き開催しているが題目及び発表者は次の通りである。

第十四回例會（二十六年一月十五日）

「ドストイエフスキーとその時代」　加藤知弘

第十五回例會（二十六年一月二十五日）

「增田四郎著『欧羅巴世界成立史觀の諸類型』について」　山浦康孝

「ピョートル改革の意義」　古森利雄

第十六回例會（二十六年二月九日）

「荘園法（Hofrecht）について」　松垣裕

Seeliger の所論を中心として荘園法の法的性格を論じ、イギリスにおける典型といはれる（v. Schwerin）「レクティトゥディネース・シングラールム・ペルソナールム」の内容に触れた後、G. v. Below を始めとする所謂「荘園法説」をめぐる論爭を述べる。

第十七回例會（二十六年二月十六日）

「古代奴隷制崩壞に関する二三の問題について。——エドワード・マイヤー「古代奴隷制」を起点として——」　森祐三

エドワード・マイヤー「古代奴隷制」中の奴隷制崩壞に関する部分を略述し、それにロストフツエフ、テニ・フランク等古代史家の古代沒落説を参照し、マイヤーが支配階級の資本の圧迫による自由農民の沒落と工業の未発達を強調した事は多とするが、奴隷階級自身の果した役割を過小評価した点を批判し、更にその資本の内容と工業未発達の原因について言及した。

第十八回例會（二十六年四月三十日）

「人民党（People's Party）成立の社会的背景について」　宮野啓二

政党成立の社会的背景となつた南北戰爭後の南部における農業問題、とくに工業面の資本主義化の犠牲となれる小作農民の窮境を指摘し、最後に政党成立をめぐつて、民主党との関連など政治面の経過についても言及する。

史學關係講義題目

——昭和二十六年度第一学期（四月—十月）

史学概論	小林教授	中世貨幣流通史
史学概論		演習（一）園太暦
国史及び日本思想史		演習（二）吾妻鏡
		古文書学
		荘園の発達
		古文書学演習
		演習　切支丹史の研究

森教授	中江兆民	西尾講師
同	明治思想史概説	同
同	東洋史	
竹内教授	五代史	日野教授
同	特講　安東部落府考	同
同	演習	同
檜垣講師	唐代史	鈴木講師

演習　陸宣公奏議　同
西洋史
概説　近世篇　小林教授
特講　理論歴史学の発展　同
演習　(A) M. H. Dobb, The Development of Capitalism　同
演習　(B) G. Meier, Soziale Bewegungen und Theorie　同

其の他

古代哲学史　長沢教授
近世絵画史　谷口助教授
明代思想史　楠本教授
大乗仏教史　干潟教授
近世文学史　元禄の文学　杉浦助教授
唐代文学史　目加田教授
十八世紀英詩人研究　前川助教授
モリエール研究　進藤教授
教育史概説　平塚教授
ローマ法　吉田教授
近世後期政治思想史　今中教授
東南アジア政治史　貝島教授
日本経済史　宮本教授
日本産業労働史　正田助教授

昭和二十六年一月以降

交換受贈雑誌目録（到著順）

東洋文化　四　東洋学会
天理大学学報　第二巻第一・二号　天理大学人文学会
歴史　第二輯　東北史学会
史学雑誌　第五十九編第十二号　東大史学会
文化史学　第一号　文化史学会
文化史学　第二号　同右
浄土教美術　法然教三部　石田一良著
商大論集　第四号　神戸商大
文化学年報　第一輯　同志社大文化学会
経済情勢　第二五六号　三菱経済研究所
東方学報　第十九冊　京大、人文科学研究所
平和台論叢　第一号　福岡商大
史学雑誌　第六〇編第一号　東大史学会
一橋論叢　第二十四巻第二号　東京商大
人文研究　第一巻第十二号　大阪市立大学文学会
人文研究　第二巻第一号　同右
日本歴史　二月号　日本歴史学会
歴史評論　一月号　民科
経済狀勢　第二五七号　三菱経済研究所
丹波史談　記念特輯号　丹波史談会
仏教史学　第二巻第一号　仏教史学会
説林　第三巻第二号　立命館文学会
立命館文学　第七七号　立命館大学
一橋論叢　第二十四巻第三号　東京商大
龍谷史壇　第三十三号　龍谷大学史学会
人文研究　第二巻第二・三号　大阪市立大学文学会
史学雑誌　第六〇編第二号　東大史学会
経済論輯　第二巻第一号　大分大学経済研究所、

史　林　第三十四卷第一・二号　京大史学研究会
考古学雜誌　第三十六卷第五号　日本考古学会
文芸と思想　第二号　福岡女子大学
說　林　第三卷第三号　立命館文学会
龍谷史壇　第三十四号　龍谷大史学会
人文地理　第三卷第一号　人文地理学会
史学雜誌　第六〇編第三号　東大史学会
史　観　第三十四・五号　早稲田大史学会

資源科学研究所彙報　第十九―二一号　資源科学研究所
芸　林　第二卷第一号　芸林会
一橋論叢　第二十四卷第四号　一橋学会
国史学　第五十四号　国史学会
経済狀勢　第二五〇号　三菱経済研究所
東方学　第一輯　東方学会
山口経済学雜誌　第一卷第三号　山口大経済会
人文研究　第二卷第四号　大阪市立大
駒沢大学学報　復刊第一号　駒沢大

歴史評論　三月号　民料
商大論集　五月号　神戸商大
地学雜誌　第五十九卷第四号　東京地学協会
経済狀勢　第二五三・四・五号　三菱経済研究所
史学研究　第五輯第四十三号　広島史学研究会
基督教史学　第一輯　基督教史学会
說　林　第三卷第四号　立命館文学会